
 学 会 記 事

第48回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成13年12月8日(土)
午後3時30分～5時30分
会 場 新潟グランドホテル

一 般 演 題

1 大腸鋸歯状腺腫の K-ras 変異の検討

廣野 玄*、***・味岡 洋一**
渡辺 英伸*・橋立 英樹*・加納 恒久*
馬場洋一郎*・西倉 健**
朝倉 均***

新潟大学大学院分子・診断病理
学分野*

同 分子・病態病理学分野**

同 消化器内科学分野***

【背景】大腸鋸歯状腺腫(SA)は管状腺腫(TA)に比べK-ras遺伝子変異率が低く、SAの発育進展に同遺伝子変異の関与は少ないと考えられる(Ajioka, 1998)。しかし、SAには同一病変内にTAを併存するもの(SA with TA)があり、同病変のSA部分のK-ras遺伝子変異については明らかでない。

【目的】SA with TAのSA部分のK-ras遺伝子変異を検索。

【材料】SA with TA: 11病変, pure SA: 34病変。

【方法】1) SA with TAをSA, TA別にmappingし, DNAを抽出。2) PCR-RFLP法, Direct sequence法でK-ras遺伝子codon 12の突然変異を検索。

【結果】K-ras変異率は、①SA with TAのSA部分: 7/11 (63.6%), ②同TA部分: 8/11 (66.7%), ③pure SA: 3/34 (8.8%)であり、①, ②と③には有意差があり($p < 0.001$)、①と②には有意差

はなかった。

【結論と考察】TAを併存するSAはpure SAと異なり高いK-ras遺伝子変異を示し、その発育進展には同遺伝子変異が関与している可能性が示唆された。

2 UC合併大腸癌(colitic cancer)の粘液形質

加納 恒久・味岡 洋一・渡辺 英伸
橋立 英樹・廣野 玄・馬場洋一郎
西倉 健

新潟大学大学院分子診断・病理
分野

【目的】潰瘍性大腸炎(UC)に合併する大腸癌の粘液形質の特徴を明らかにする。

【対象】UC合併sm以深浸潤癌(UCCA)8病変, 同dysplasia 7病変, UC非合併大腸進行癌119病変〔粘液癌(MCA)37病変, 非粘液癌(nMCA)82病変〕

【方法】MUC2, MUC1, MUC5AC免疫染色で陽性細胞頻度30%以上をスコア(+)とし, MUC2/MUC1/MUC5ACの+/-の組み合わせで粘液形質を判定した。

【結果】1) UCCAの5/8(63%)は粘液癌であった。2) UCCAの粘液形質は4/8(50%)がMUC2+/MUC5AC+であり, 同頻度はnMCA(同0/82)より有意に高かったが($p < 0.01$), MCA(同16/37, 43%)とは有意差はなかった。3) dysplasiaも5/7(85.7%)がMUC2+/MUC5AC+であった。

【結論と考察】UC合併大腸癌に特徴的な粘液形質はその発生初期(dysplasia)から発現している。しかしこれはUC合併癌に特異的なものではなく, その組織型(粘液癌)に由来するものと考えられた。